

IS～インフィニット・  
ストラトス 世界の狭間  
で

yuichi526

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## あらすじ

二度に渡る二つの大戦を終わらせた少年と少女。新たなる戦いに歩み出そうとしている少年と少女達。人類種の天敵とまで言われた青年。彼らが一つになり新たなる仲間と敵に出会う時彼等は何を思うのか。

# 目次

プロローグ	1
第一話「全ての始まり」	4
第二話「天敵の消失」	12
第三話（オリジナルキャラクターデータ）	17
第四話「異世界」	25
第五話「困難の予兆」	33



# プロローグ

(プロローグ 1 ガンダムSEEED編)

C・E74。世界はかつて二回に渡る大きな戦争の痛手から二人の少女の奮闘で立ち直りつつあった。そして、地球連合軍とZ・A・F・Tは軍を一つに統合し、世界政府統合軍として新たな歩みを進めていた。しかし、世界には今だ新たな戦いと大きな問題に悩まされていた。

その一つが複数の大きな軍事企業達の進出であった。企業たちは様々な高性能な軍事兵器、強化人間技術を開発、コーディネーターやナチュラルの紛争地域。そして、テロリスト達に販売したのだった。地球連合とZ・A・F・Tはこれに半武力的に介入するが、結果は地球連合とZ・A・F・T軍の撤退という形で幕を降ろしたのだった。

そして、もう一つがレイヴンズ・ナインと呼ばれる組織に所属する傭兵達の出現である。彼らはレイヴンと呼ばれ、企業が創り出した既存のMSを上回るMS。ハイエンドMSを乗りこなして戦場を駆け回ったのである。彼らの中には体をほとんど人工の物に置き換えた強化人間が存在しているとまで言われている。この傭兵たちが世界政府軍の撤退の主な理由である。

世界は再び新たな戦乱を迎えようとしていた。

(プロローグ2 IS〈インフィニット・ストラトス編)

世界はマルチプラットフォーム（IS〈インフィニット・ストラトス〉の登場で変わってしまった。ISはもともと宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツ。開発当初は注目されなかったが、ある科学者が起こした「白騎士事件」によって従来の兵器を凌駕する圧倒的な性能が世界中に知れることとなり、宇宙進出よりも飛行・パワード・スーツとして軍事転用が始まり、各国の抑止力の要がISに移っていた。更にこのISの大きな特徴は女性にしか反応しない点である。その影響で男女間の関係は男尊女卑から女尊男卑に移り変わったのである。そして、十年の月日が経った頃。男では使えないはずのISを男が使うという事件が起きたのだ。世界は再び変わろうとしていた

(プロローグ3 ACF A編)

世界は壊れていた。国家解体戦争の勃発と企業連の台頭、度重なる企業間戦争に乱獲と乱開発。そして、コジマ粒子の汚染によって地球は人が住めるほどの土地ではなくなっていた。そして、人類の半分がはるか上空に飛ぶ揺り籠、クレイドルへと移り住んだのだ。しかし、そんなある時人類史上最大の事件が起きる。アーマードコアネクストを駆るリンクスと呼ばれる傭兵二人がクレイドル03を襲撃。一億人を虐殺するとい

うものだった。企業連はこの2人に対し、最精鋭五人のリンクス部隊をぶつけるが、二人の内一人が死亡し最精鋭部隊は全滅という結果になった。生き残った彼により人類は更にその数を減らした。人類種の天敵とまで言われた彼は自らの始めた事に対して決着をつけるため最後の揺り籠、クレイドル01へと向おうとしていた。

## 第一話「全ての始まり」

プラントから離れた場所にある小惑星帯、その中を一機のMS格納可能シャトルが飛んでいた。その中には地球の某国との会談を終えた。ラクス・クラインとキラ・ヤマトが乗っていた。ラクスは少し憂鬱な目で小惑星帯を眺めている。

「どうしたの?」

そんな彼女を見て少し心配な感じで声をかけるキラ。

「いえ、なんでもありませんわ。少し疲れているだけですわ」

某国との会談内容は最近紛争地域である某国に対して介入してきたレイヴンのことである。彼等はいきなり戦場に現れてはその力で戦場をかき乱すのであった。世界政府もそれに対して出来るだけの支援はするのであるが中には一般兵では太刀打ち出来ないほどの実力を持っているものもある。そういう場合は世界最高戦力であるキラやアスラン・ザラ、シン・アスカを投入する場合もあるのだ。

「今回もあの国はレイヴンの介入でかなり戦力を失いましたわ。ただでさえ、食糧問題やいろいろな問題を抱えていますのに」



「そうだね・・・」

キラは少し溜息を吐く。前議長であるギルバート・デュランダルに明日を戦うと言い放った事がある。その時は正しいと信じた。しかし、今となっては苦しむ人々の姿を見て心の奥底にデュランダルが提示したテストイニープランも悪くないのではないかとほんの少し思いはじめたのだ。

「おーい、隊長。あと少しでプラント宙域だ。帰ったら隊の事は任せて二人でデートしてこいよ」

シャトルのコックピットから大声で言い放ったのはヤマト隊の副隊長であるヴァイス・ブラッドだ。彼は暑そうに銀髪のショートヘアーを掻き巻る。

「ありがとうヴァイス。貴方も帰ったらゆっくり休んでくださいね」

「なはは、隊長や姫さんほど忙しくはしてねえけどな」

最近、傭兵や企業連の所属部隊による要人の襲撃が増えているため要人の警護のため腕利きのパイロットがMS付きでお供することが増えているという現状だ。

「しっかし、あれだな隊長。こないだの某国で遭遇したレイヴンはやばかったな。あいつは完璧頭イカれてた」

「うん、それに強かった。たった一機で某国の中隊を壊滅させて僕たちを追い詰めたんだから」

かなりの上位ランカーだったのか、かなりの実力を有していた。しかも強化人間技術の副作用なのか喋る言葉が潰すという言葉だけだったのだ。改めて企業の技術面の強さを思い知らされる。

「そろそろ、本格的な武力正面衝突もあるかもな」

「そんなことはさせない。絶対に」

二人がそんな事を話しているとリーダーに一機の機影が引つ掛かる。

「ん？なんだ？こんなところでMS反応だと？」

「ザフトの巡回機かな？」

「いや、違う・・・あれは」

10時方向に目を凝らして見てみると確かにその機体はザフトのものでも地球連合のものでもなかった。そう、ハイエンドMSである。

「チツ、まさかこんな所で遭遇すんのかよ。隊長！この位置じゃ見つかる！先に出て注意を逸らすから隊長達はここで待機してくれ!!」

「一人じゃ危険だヴァイス！僕も！」

「なあに、大丈夫だって。それに騎士様が姫さんを一人にしてどうすんだよ!!」

ヴァイスはニヤツとするとさっさと愛機に乗り敵機に向かって飛んで行ってしまった。

「キラ？レイヴンですか？」

「うん、大丈夫。君は僕が守るから」

ヴァイスの機体は最近軍部によって作られた複合型機と言われるものだった。別々のMSの特徴を併せ持つ事をコンセプトに作られた機体である。この技術はメサイア攻防戦のあたりから大体できていたようだが。彼の機体「レグザ」はキラのフリーダムとシンのデステイニー両方の特徴を併せ持った機体だ。因みにこの技術は当初カガリとラクスは反対したが情勢を考えると仕方が無いと軍部に押し切られてしまったのだ。

「クソ傭兵が、ぶっ殺してやる!!」

荒々しい言葉を言い放った後、背面のウイングスラスターを全開にし、対艦刀アロンダイトを抜き放ちながら白い敵機に肉迫して行った。

「げっ……こいつ、「アルギュロス」じゃねーか!？」

白銀の名の通り全身を白で基調され所々を黒い装甲が付いている。肩には大型パイonder、背面のブースターユニットには大型ブースターが装備されている。鋭角的な機体は接近してきたレグザに素早く反応して両手にもつ大型のハイレーザービームライフルを連射してきた。この機体は軍に登録されている接近禁止指定機体の一機だった。これに登録されている機体は強すぎて対処するのは最高戦力の三人だけが許されている。他のパイロットでは相手にはならないのだ。

「くっ、マズイのと当たっちゃまったな」

機体を捻りながら光弾を回避し、敵機に斬撃を袈裟斬りに放つ。するとアルギュロスの大型ビームライフルが光に包まれて消えたのだ。そして、ブースターユニットからビームサーベルを抜き放ち鏢迫り合いになる。

「量子格納だど？なんてこったい」

企業は一体どこまでの技術を持つているのか。しかもよく見ると周辺にはヴェサリウス級の戦艦の残骸と何機ものMSの残骸が漂っていた。どうやら作戦終了の直後だったらしい。

「やりやがったな!!おめえ!」

するとアルギュロスから通信がかかってきた。

「こちらは、第三企業アルゼル社所属の傭兵コードネームはゴースト。いきなり来るとは、いい度胸だな」

「なに？お前らは一体なんなんだあ!？」

閃光を放ちながら二機は互いのカメラアイとバイザーカメラを照らす。

「俺はいま帰還しようとしたところだが、お前はヤマト隊のヴァイスだな？しかも、この前ある国でハングを倒した奴と聞いてるぞ。キラ・ヤマトと一緒になあ」

「あの頭のイカれたやつのか」

ゴーストが搭乗する機体、アルギュロスは鏑迫り合いになりながらも頭部を何かを探すように動かす。そしてあるものを見つけたようだ。

「あのシャトルだな。キラ・ヤマトとラクス・クラインが乗っているのは」

「ぐっ、てめえ!!」

アルギュロスはレグザを蹴り飛ばし、シャトルへと猛スピードで向かう。ヴァイスも急いでその後へ続いた。

「なんて速さだ!!」

「ふん、これは高い追加報酬になりそうだな」

身体にかかるGを感じながらヴァイスは必死にその後を追うがなかなか追いつかない。

「もらったあ!!」

アルギュロスの放った光弾がシャトルへと直撃。シャトルは爆発四散してしまった。

「しまった!キラ、ラクス!!」

しかし、すぐに爆炎の中から一発のビームが放たれアルギュロスを狙う。ゴーストはバインダーを全面に展開し、シールドを発生させて直撃を避ける。

「くっ!!」

「キラ!?」

爆炎を切り裂いて現れたのは白く青い翼を有した大天使だった。キラのストライク・フリーダムだ。

「ふん、既に起動状態だったか」

「キラ! ラクス! 無事か!?!」

「うん、こっちは大丈夫!」

「ヴァイスは? 無事ですの?」

二対一となり不利と判断したアルギュロスは直様、戦域から離脱しようと試みる。しかし、そこにあるはずの無い重力に捕まり逃れられなくなる。

「なんだ!?! 重力だと!?!」

「一体!?!」

「キラ、あれを!!」

ラクスが指を指した方向を見るとなんとそこには宇宙空間にできた大穴だった。三機は直様この異常事態から逃れようとする。しかし、いくらブースターを吹かしても逃げられないのだ。

「やべえ!!」

「ぐっ!?!」

「キラ!!」

「あれはまさか、おい！オペレーター!!!」

三機は黒い大穴の中に飲み込まれて行った。そして、この出来事が後に起こる大きな戦いの引き金になるのだった。

## 第二話「天敵の消失」

人類最後の揺り籠であるクレイドル01。そこに人類最大の天敵が迫っていた。その接近を察知し、ノーマルACが防衛網を張りながら展開する。

「クレイドル01を確認、更にノーマルAC部隊を確認。排除行動に移る」

かつて、何億もの命を一人で奪った彼の機体は過去に共闘したライアークの主力であったホワイト・グリントと同じ凶面を独自に入手し、更に改修を加えて色を黒に塗り替えたものである。因みにホワイト・グリントを設計したアーキテクトのアブ・マーシユは彼と遭遇したあとに行方不明になっていた。まさに黒い閃光と言うべき機体が揺り籠に迫っているのだ。

(よお、首輪付き……)

「くっ……」

彼の心の中でこんな悪行に誘った男の声が勝手に蘇る。

「なぜだ!?なぜお前はこんな事が出来る!?あそこにいる人達は何の罪もないんだぞ」

ノーマル部隊の隊員の一人が突撃してくるが、彼は無造作にオーメル製のノーマルのボディにライフルを連射した後、蹴飛ばして戦場から叩き落とす。鉄の塊が海に消えて



行った。

「各機!!陣形を崩すな!!相手はあの人類の天敵だ!!」

「!!「ハッ!!」!!」

(貴方方にはここで果ててもらいます。理由はお分かりですね?)

次はリリウム・ウォルコットも声が、心の中で響く。

「終わらせる。」

心の中に響く声を振り払うように愛機である(ストレイド)のクイックブーストを吹かしながら敵の攻撃を軽々と避けて行く。

「奴に反撃させるなあ!!」

背面のミサイルポットが火を吹きミサイルが飛来して行く。そして、敵に直撃する前にミサイルの装甲が開いて中から8個の小型ミサイルに分裂した。いわゆるクラスターミサイルだ。

「回避行動!!」

「邪魔をするなあ!!」

反応のいいパイロットが搭乗したノーマルは回避をするがそれでも何機も落とされて行く。そしてその消えたノーマルの穴を埋めるように他のノーマルが次々と参戦してくるどうやら物量で責めてくるつもりようだ。相手の攻撃はプライマル・アーマー

が防いでくれるが、限界がある。

（確信犯なんだろう？）

（所詮は獣だ）

「くう、いつも頭のなかでっ．．．」

過去の亡霊の声を振り払いながら彼は目の前の敵と戦い続ける。

両手のライフル、背面の二つのミサイルポットを連射しながら敵を次々と光の花へと変えていった。

「もうやめてっ!!」

そんな声が聞こえてきたと思ったら、ストレイドに攻撃が直撃した。二発目を避けて攻撃してきた敵を探す。

「なにっ!?!」

彼の目に入ってきたのは白く、ストレイドと同じ姿をした機体。ホワイト・グリントだった。

「こんなことはもうやめて!!こんな貴方のすることじゃない!!」

「あれは、ライン・アークのホワイト・グリント!?!」

「フィオナ・イエルネフェルト．．．アナトリアの傭兵．．．」

あの共闘した時と同じく彼女と彼は天敵に問いかける。

「よく考えて見てください。本当は貴方は……」

「生きているとは聞いていたがな」

フィオナの説得には動じず、天敵はアナトリアの傭兵に対し攻撃を開始した。

「フィオナ。近くで見ているんだろうが、遅かったな。おれはもう止まらない。」

黒と白の機体が交錯し、その後を爆発が追った。ライフルで撃ち合い、マニピュレーターで殴り合う。

「セレンさんだつて、こんなこと。」

通信からセレンという名前が出た瞬間、天敵の動きが鈍る。彼女は天敵のオペレーターであり、良き母であった。

「そ、その名を言うなああ!!!」

彼女が全てを教えてくれた。施設から天敵を引き取り、戦い方を教えてくれた。そして、彼女だけがあの戦いの時に天敵に殺されることになっても尚も彼に優しい言葉を掛けてくれた人であった。

「なにも知らないくせに!!」

ホワイト・グリントに突っ込もうとした瞬間、異変が起きる、真横からの重力に捕まったのだ。よく見ると空中に黒い穴が見えた。

「なんだあれは!?!」

「退避!!」

天敵も機体を必死に動かした。脳から発せられる電磁パルスがAMSを通して機体に指令が送られてストレイドはオーバーボードブーストを発動する。しかし、音速を超える速度でも逃げられはしなかった。ノーマル、ホワイト・グrintが穴に飲み込まれてクレイドルにもそれが影響する。

「キヤアアアアっ!!!」

フィオナの声が聞こえたかと思うと、ストレイドもその穴に飲み込まれて行った。

(当然か、お前は私が見込んだのだからな。なあ、そうだろう? ジュリウス?)

「セレン・・・これが俺の罰か・・・」

ブラックアウトする前に天敵は蒼い翼を付けた白い機体を見た。しかし、どうでもよかった。この時はようやく彼女のもとに逝けると本気で信じたのだった。

## 第三話（オリジナルキャラクターデータ）

人物及び、兵器報告書

製作時期不明

製作者不明

送信相手不明

人物データ

ヴァイス・ブラット

性別 男性

年齢 20

身長 179 cm

国籍 プラント アプリリウス

搭乗機体 レグザ

髪の色 銀

所属 ヤマト隊

人物詳細

血のヴァレンタインの悲劇によつて両親を失う。その後、Z・A・F・Tに入隊し戦場に赴く。メサイア攻防戦の後に色々あつてキラの隊に配属された。実力も赤服なだけあつてかなりなもの。粗暴な口調がやや目立つが平和への渴望は人一倍強い。その為、ヤマト隊に配属されるまでは上官と度々口論になつたり命令違反をすることもしばしば。しかし、仲間からの信頼はとても高いようだ。メサイア攻防戦の時にはグフで出撃し、ギルバート・デュランダルへのステイニー・プランに疑問を抱きながらも戦つていたがキラ・ヤマトの搭乗するストライクフリーダムに撃墜されている。

傭兵

コードネーム ゴースト

年齢 20前半であるが性格な年齢は不明 恐らく22と思われる。

性別 男性

身長 185cm

本名 秋葉結城 なお本名であるか不明

国籍 不明

所属 企業傭兵

搭乗機体 アルギュロス

髪の色 茶

喫煙しているタバコ ピースライト

### 人物詳細

詳しい経歴は一切不明。しかし、かなりの好戦的な性格なようで傭兵を天職と考えている模様。なお、彼は企業により皮膚、内臓、骨、筋肉、神経と言った体の全てを強化改造されている。この事件を皮切りにキラ・ヤマト達と行動を共にして企業から狙われている。

### 追記

C・Eのデータで数世紀前、西暦2014年頃に存在したアメリカ軍の非正式特殊部隊（ゴースト部隊）に同性同名で顔が瓜二つの人物が確認されているが本人との関連性は一切不明。

### 人類種为天敵

本名 ジュリウス・マーフィン

年齢 不明

性別 男性

身長 174 cm

体重 不明

搭乗機体 ネクストAC ストレイド

髪の色 金

人物詳細

一切不明

アナトリアの傭兵

本名 エドワード・フィッツ

年齢 不明

性別 男性

身長 180cm

体重 不明

搭乗機体 ホワイト・グリーント

髪の色 黒

人物詳細

一切不明

フィオナ・イエルネフェルト

年齢 秘匿事項

身長 166cm

体重 超秘匿事項



搭乗者機体――

髪の色 金

人物詳細

今のところ詳しくは分かっていないが、アナトリアの傭兵のオペレーターという事は分かっている。

オリジナルMSデータ

レグザ

形式番号ZGMF-XR001

搭乗者 ヴァイス・ブラット

全高 18.33 m

全重量 79.72 t

動力新型燃料電池

搭載武装

MMI-GAU27D 31mm近接防御機関砲

MX-4D ビームシールド×2

RXDF-27D 高エネルギービームライフル

MMI-715 新型対艦刀アロンダイトmk-II

M3000GX 新型高エネルギー長射程ビーム砲

RQM61Fフラッシュエッジ3ビームブーメラン

詳細

企業軍のハイエンドMSに対抗してZ・A・F・Tが新たに考案したAFW思想のもとに作られた第一号機。AFW思想は異なる二つのMSの特徴を併せ持った機体を作り上げるという思想で本機の場合は旧フリーダムとドステイニーを融合させた機体である。ラクス・クラインが議長に就任してから軍縮に繋がると思われたが企業軍の登場によりそれも言ってもらえないことが伺える。

アルギュロス

型式番号 AC—G/IX

搭乗者 ゴースト

全高18.44m

全重量 不明

動力 不明

基本武装

KARASAWA—mkIII ハイレーザービームライフル

GHC—21高エネルギービームサーベル×2

## HXS—D 物理シールド

## 詳細

企業オラクル社が作ったハイエンドMSのワンオフ機。白と黒が基本カラーの本機は基本武装の他にマシンガン、グレネードランチャー、ミサイルポット、スナイパーキヤノン、腕に装着型の大型ビームブレードなど多種多用の武装や装置を装備しているところが目撃されている。更には本機は基本は二脚なのだが、作戦によつては四脚、フロート、タンク、逆関節、軽量二脚など脚部を付け替えて異常なまでの汎用性を見せている。なお、これは他のハイエンドMSにも見られる特徴である。そして、本機は一見するとガンダムタイプには見えないが全身の追加装甲や装備をパージするとシンプルなガンダムタイプになることも確認されている。

## 追記

本機だけではないが、オラクル社、デット社、エリエル社、エリムス社、オーガスタ社の五社が開発、販売しているハイエンドMSはどれも今回の事件で確認された人類種の天敵の世界で存在した企業連の技術及びAC（アーマードコア）と似通った点が幾つも挙げられる。この関連性は一切不明で引き続き調査を続行する意向。

## ストレイド

## タイプ ネクストAC

型式番号 不明

搭乗者 ジュリウス・マーフィン

全高 10 m前後

全重量 不明

動力 コジマ粒子

詳細

不明。

追記 動力のコジマ粒子を高濃度圧縮すると緑色の霧状に目視でき、更には環境及び人体に非常に害を成す事が判明している。危険ではあるが軍事的にも、技術的にも非常に興味深い物である。

報告は以上である。記述した機体データを踏まえ前々から我々が製作しようとしていた機体、対イレギュラー全距離対応G型兵器の開発に多いに貢献できるのは明白である。尚、この本文は管理者に転送されたのち処分するものとする。

## 第四話 「異世界」

そんな馬鹿な事が起きるはずがない。しかし、実際に起きてしまっているのだ。宇宙空間に居たはずのキラは宇宙に出来た穴に吸い込まれて気付くと地球のはるか上空にいたのだ。乗っていた筈のストライクフリーダムは何処かに消えてしまっている。キラ達は海上に真つ逆さまだ。

「ぐっ、ラクス!？」

必死にキラは愛する人を探した。やはり、彼女も落ちている。ピンク色の髪が強風になびいていた。彼は必死に彼女の元に行こうとするが、ここは空中。なかなか前に進まない。すると、いつの間にか自分の右腕に見に覚えのない青いブレスレットが付いていることに気付いた。

「これは……」

何故かは分からないがキラはそれが姿形を変えたストライクフリーダムだということに、恐らく本能的に理解する。ヘルメットを取って、左手でそれを掴み、念じるように祈った。

(頼む、フリーダム。来てくれ!!)

その、思いに呼応してかブレスレットが突如として青く光りキラの全身を包み込む。すると、それがストライクフリーダムに形を変えた。

「これは!」

なんと、キラがストライクフリーダムを着込んでいるのだ。モビルスーツの様に乗り込んでいるのではなく、パワードスーツの様に着込んでいるということだ。まさに自分がストライクフリーダムになった気分になる。

「……!?!」

フリーダムのカメラアイから膨大な量の情報が流れ込んでくる。機体操作、武装情報、外気温、etc。キラはそれらを瞬時に理解するとすぐさまブースターを吹かしてラクスのところへと飛んで行った。

「ラクスツツツ!!」

彼女の落下速度とフリーダムの速度を合わせなるべく受け止めた時の衝撃を和らげようとする。そして、海面から5mの距離で彼女を受け止めた。

「うっ……」

「ラクス?」

彼女は気絶している様だ。キラはホツとしていると、上からもヴァイス達が自分の機体を展開し降りてくる。そこでキラはあることに気付いた。あの時、居たのはキラと

ヴァイスとラクスとあのレイヴンだけだ。しかし、降りてくるのは他にもう二機見慣れない機体がいる。キラが唾然としてみるとアルギュロスから光弾が放たれた。

「いきなり!?!」

フリーダムを装着しているキラならまだしも、ラクスは生身だ。彼女を庇うように敵に背中を向ける。しかし、その光弾はヴァイスのレグザが展開したビームシールドで弾かれた。

「てめえ……いきなりかよ」

「状況がはつきりしないが、お前らは敵だからな」

すると、今度は白い機体から実弾が放たれ、アルギュロスに当たりそうになった。その左腕には金髪の女性を抱いている。黒い同じ形の機体も降りてきて白い機体に銃口を向けた。

「おいおい、こんなところでパーティか?」

ゴーストがそう愚痴る。しかし、状況が掴めないなか戦つてもしょうがない。そう考えていると先にアルギュロスが銃口を下げる。

「分かった、分かった。全く未知な状況だ。ここは停戦協定と行こうぜ」

確かに、今は戦っている場合ではない。未知の機体達も銃口を下げた。

「あんたらも同じだろ? 穴に吸い込まれたんだろ?」

「……」

「そうだ」

「どうやら、同じ境遇らしい。しかし、さっきから気になっているのはその機体だ。キラもヴァイスも見たことの無いタイプの機体。すると、ゴーストが興味津々に口を開く。

「しっかし、あんたらのその機体。見たことのないタイプのMSだな」

黒い機体のパイロットが本気を感じてキラたちが予想していない答えを弾き出した。

「MS? 何のことだ? この機体はネクストACだ」

「AC? MSじゃなくて?」

「おやあ? これはまさか?」

新たなる疑問に全員が首を傾げていると、レーダーが何か接近してくるのを伝えた。

「なんだ!」

「キラ! 俺の後ろに!」

全員がすぐに戦闘態勢に入る。女性を抱えているフリーダムと白い機体が後ろ。残りが前に出る。

「おい、キラ・ヤマト! 俺をこの場で雇えよ!」



いきなり、ゴーストが変なことを言うのでヴァイスが変な声を挙げた。

「こんな時に何をっ!？」

「俺は傭兵だ。今、この場で俺を雇えば後も俺に命令できるぜ？ 実力は知ってるだろ？」  
確かに彼を今雇えば何かと便利だ。しかし、キラの中でそれに対して警鐘が鳴る。そんな事をしていううちに何かが見界に入った。その何かはパスワードスーツのようだった。しかし、更に気になるのはパイロットが全員女性だという事。

『そのIS共、ここはIS学園の近くだ。ここで何をしている？』

隊長らしき女性の凛々しい声が通信越しに聞こえてきた。この時キラは次にどうするか決め兼ねていた。

遡ること少し前の時間。ここはIS学園の教員室。黒髪のスーツ姿の女性が色々と資料を整理している。彼女の名前は織斑千冬。このIS学園の教員で恐らくこの世界最強の人物だ。

「織斑先生、コーヒー如何ですか？」

そう言っただけに彼女にコーヒーを渡してきたのは山田真耶、千冬の色々と補佐をしている教員だ。

「ああ、山田先生。ありがとう」

そう言っただけに彼女はコーヒーを受け取り一口飲んだ。苦い味と独特のコク、香ばしい匂

いが口いっぱい広がった。

「そう言えば、もう直ぐですね。弟さんが入学されるの」

「……」

この世界特有の力。IS《インフィニット・ストラトス》は本来女性にしか使えない筈のマルチプラットフォームだ。しかし、彼女の弟である織斑一夏が受験試験会場でISを動かしてしまうという大事件が起きた。それで本来は女子高である筈のIS学園に特例として入学することになったのだ。

「全く、どこの天才の仕業だ?」

「えっ?」

直後、学園中にサイレンが響き渡る。立て続けにアナウンスが流れた。

「なんだ?」

「これはっ?」

『近海で異常な重力場を確認。教員は事態の收拾及び……』

千冬と真耶は素早く教員室を出て自分達の持ち場に向かった。

「しかし、織斑先生。異常な重力場とは一体?」

「私にも分からん」

ちよつとしてから、真耶はフランスの量産型第二世代《ラファール・リヴァイヴ》に

乗って他の教員達と共に現地へ、千冬はナビゲーターブースでオペレーターをしていた。

「山田先生、あれを!？」

「なに? あれは?」

他の教員の一人が指差した方向を見るとそこには重力場は無く、代わりに見たことのないISが五機浮遊していた。

「なんだ? あの機体は?」

全員が確認すると動揺が広がる。IS機は今のところ世界で467機しかないがその五機はどれも該当しない機体だった。見た目は全身装甲《フルスキン》タイプだ。

「新型機?」

教員達が未確認機に近寄ると一気に警戒態勢に入る。千冬がオープンチャンネルで呼び掛ける。

『そのIS共、ここはIS学園の近くだ! ここで何をしている?』

すると、青い翼の未確認機から返事が返って来た。

「僕はZ. A. F. T所属のキラ・ヤマトです。貴女達は一体?」

「男の子?」

一気に教員達がざわめく。この未確認のISに乗っているのは男なのだ。本来は使

えない筈の。

「Z・A・F・T? 一体何を言っている? 山田先生、そいつらを拘束しろ。詳しい事情を聞く」

「なんだなんだ? やる気かよ?」

今度は白く追加ブースターを装備した機体が身構える。その冷たい闘気に真耶は身震いした。

「まって! ここは穏便に済ませるために彼女達に任せよう。こっちは怪我人もいるし。」

青い翼の未確認機が言うのと未確認機達は武装を解き始める。

「では、ついてきて下さい」

キラ達は真耶に警戒を含まれた声でそう言われて、ラファール・リヴァイヴ部隊について行った。

「いいのか? 隊長さんよ?」

「うん、今はそうした方が良さそうだしね」

周りを見回すと、ちよつと先に見慣れない建物がある。それに斜め後ろを追従して来ているネクストACや前のパワードスーツの事を考えると嫌な予感がキラの頭を過つたのだった。

## 第5話 「困難の予兆」

IS学園の施設の中で一番高い塔である中央タワー。その頂上付近にある一般の生徒達には知らされていない秘密の拘束部屋がある。そこに、キラ達はいた。

「……………」

一部屋に唯一存在する小窓から外を眺めるキラ。外に見える風景から察するにここは日本で時期的には春であろう。因みにこの部屋にはキラとヴァイスとゴーストが、隣の部屋にはあのネクストACのパイロット達が拘束されている。

「全く、散々だなおい」

そう言つて、ゴーストがおもむろにポケットからタバコを取り出して、吸い始める。

「こんな狭い部屋で吸うんじゃねえよ」

「吸わなきゃやってらんねっての」

(……………)

彼らの今の服装はキラとヴァイスはパイロットスーツ。ゴーストはカーゴジャケットにカーゴパンツだった。ゴーストは機体から降りる時は弾倉入りの防弾チョッキも着ていたが、あの女性達に没収されている。

「どうする、隊長さんよ？」

「今はまだ大人しくしてた方がいいだろうね」

そう言いながらキラはまた外を眺めてかつての戦友の顔を思い浮かべていた。

(アスラン・・・シン。君達はいまどうしてる?)

ラクスとあの金髪の女性は恐らく医務室に連れて行かれた。治療を受けているのだろうか。

そして、その頃千冬達はいええば。

「これは一体なんですか？」

「・・・」

侵入者達の機体スペックデータを目にした真耶が声を張り上げる。その機体達にはまだこの世界には実現していないような技術がふんだんに使われていたのだ。

「羽根付きの二機には実弾無効化装甲。しかも、このフリーダムという機体にはコアの部分に核融合炉が搭載されています。残りの三機の動力源には未知の粒子が使われているようですね」

高出力のビーム兵器にビームシールド。ラファール・リヴァイヴを上回るほどの量の後付け装備など、他の国が見たらすぐに戦争に発展しかねない程の技術が盛り込まれている。

「厄介なものを拾ったみたいだな」

「織斑先生。このホワイトグリンとストレイドの動力に使われている粒子ですが、どうやら、人体や環境に非常に悪影響を及ぼすみたいです。今は、完全に遮断されているので問題はないと思いますが」

「競技用ではないな」

「これは完全なる兵器。人を殺すための兵器だと千冬は確信する。このまま、国際ＩＳ委員会に報告して身柄を引き渡すわけにも行かなくなってしまう。」

「しかし、これらの事を考えると奴らがこの世界の住人と考えるのが難しくなってきたな」

「そ、そんなことってあり得ますか？」

「真耶は苦笑いをしながら応えるが、他の世界の住人と言うほうが確実に筋が通っている。異常な重力場の代わりにいた7人組。そして一人が言ったZ・A・F・Tという謎の組織。この世界の技術ではない技術を使っている未知の機体。」

「では、織斑先生はこのＩＳはＩＳではないと」

「ああ、おそらくな。こいつらの存在を各国が知れば、めんどくさい事態にもなりかねん」

おそらく、躍起になってこれらを奪いにやってくるであろう。そんな事態はなんとし

でも防ぎたいものだ。すると、千冬は何かを感じ取り部屋を出て行ってしまった。

「織斑先生？」

驚いた真耶を尻目に千冬は部屋を出てそして、中央タワーを降りてIS学園の敷地内にある小さな池に向かった。その近くに植えられている木にある人影が見えた。

「やあ、ちーちゃん」

「こんなところで何をしている？」

彼女の名前は篠ノ之束。ISの開発者で千冬の幼馴染であり、全世界から指名手配を受けている人物だ。どうやってこのIS学園に侵入したかは誰も分からない。

「やだなあちーちゃん!!分かってるくせに」

とても高いテンションで千冬に抱き着こうとする束。それを、千冬はアイアンクローで阻止した。

「やめろ、どうせあいつら事で来たんだろう？」

「そりやそうだよ、この束さんが作った覚えのないIS。まあ、データを見る限りISとは限らないけどねえ。とにかく、それらを持った七人組がいきなり現れたんだからちーちゃん達以外の人間には興味が湧かないこの束さんでも興味が湧くさ」

そう言いながら、空中投影型のディスプレイを四枚映し出した。それらは真耶が見ていたあの五機の詳細データとそして、あの7人の身体データだ。



「みてみてちーちゃん。あのフリーダムっていう機体には高度な暗号化ロックシステムがあつてなかなか、ハッキングできなかつたけど他の機体にはハッキングできたよ」

そう言つて、一枚のディスプレイを見せてくる。そこにはあのフリーダムを除く4機の戦闘映像が映し出されていた。そこには宇宙空間での戦闘や、あの五機同様に見慣れない機体や戦艦と戦闘を繰り広げる様子が流れていた。

「ちーちゃんも分かつてるだろうけど明らかに彼等はこの世界の住人じゃないし、あのISもISじゃない。これらを世界が知ったらどうなるだろうねえ？」

「……」

確かに、いま世界は数に制限があるISに色々と頭を悩ませているところだ。そこにISと同等の力を持ち男も使える兵器が知れ渡ればまた世界は大きく変わってしまう。

「まあ、もともとあれらはIS以上の大きさらしいけど誰かがISと同じサイズにしたっぽいけどね。その誰かはこの束さんでも分からないよ？」

「どうしろと言うのだ？ 私に？」

「えへへ、分かつてるくせにく。彼等をいつそこの学園の生徒にしちやえばいいんだよ」「なにを馬鹿なこといつている!？」

しかし、そこまで言つて千冬は言葉を飲み込む。確かに今にIS委員会に報告すれば余計な争いの種になる。ならば、世間的には一夏に次ぐISを使える男達にしてしまえ

ばある程度の問題は減るだろう。

「まっ、東さん的には欲しい情報とか色々と手に入ったけどね〜」

「おまえ、本当はそれが目的で！」

すると、いきなり強い風が吹いたと思ったら東はどこかにその姿を消してしまつてた。

「全く！」

千冬が頭を押さえていると、後ろからある老人が歩いてきた。彼の名は《轡木十蔵》表向きはIS学園の用務員だが、本当の正体はこのIS学園の本当の運営者である。

「話は聞かせてもらいましたよ。確かにそう措置をとったほうが生徒達にとつてもよいでしょうね」

「すみません、手間をかけさせます」

一方その頃キラ達といえば、ゴーストをどうするか決めかねていた。

「キラ、本当にこいつを雇うのか？」

「うん、今は少しでも戦力が欲しい所だからね」

「よっしゃ！報酬はC・Eに戻ったらたんまり貰うぜ!!」

「こんな戦争屋をかよ」

そんな事を言っていたら、牢屋の扉が開き千冬が入って来た。どうやらキラ達をどう

するか決めた様だ。

「出る」

彼等は彼女に従う。牢屋から出ると隣の牢屋にいたあのネクストパイロット達も出てきた。

「あんたら、結構静かだったな。男だけで窮屈じゃなかったか？」

「……」

二人とも応えない。そんな反応をされたヴァイスは気まぎれ首をポキポキ鳴らした。

「お前らのこれからの扱いを決めた。私的にもどうか迷ったがお前らはこの学園の生徒にする事にした」

「なんだと!？」

「マジかよ。この歳でまた学校でお勉強かあ!？」

ゴーストとヴァイスがそんな反応し、キラはやっぱりと言う顔を。ネクストパイロット達はただだんまりだった。

「お前らも気付いてるだろうが、ここはお前らのいた世界とはどうやら違う世界だ。それにあの機体達の力はこの世界ではイレギュラーだ。余計な混乱を招く」

「分かりました。確かにその方が良いでしょうね」

そんな事をしてしていると真耶が室内に入ってきて来た。

「織斑先生、二人が目を覚ましました」

どうやら、今まで気絶していた女性陣が目を覚ましたらしい。一同は急いで特設医療室へ向かう。

「ラクス!!大丈夫!?!」

「.....」

キラがラクス、アナトリアの傭兵改めエドワードがフィオナの所へ駆け寄った。

「キラ?ここは何処ですの?それに貴方は誰ですの?」

「えっ?なに言ってるんだよ?俺だよヴァイスだよ!?!」

しかし、彼女はキラの部下であるヴァイスを初対面であるかの様な目で見る。もしかやと思いキラはある質問を試してみた。

「ラクス、最後に覚えてるのは?」

「確か、マルキオ様の診療所で子供達と遊んで.....それからあまり覚えてませんわ」

「これってもしかして?」

「記憶喪失みたいだな」

キラは頭を抱える。違う世界に飛ばされただけじゃなくラクスは記憶を半分失ってしまったのだ。ヤキンドゥー工戦の直後まで覚えているのはまだ幸運だ。

「更に面倒くさい事になっちまったな」

キラはととてもとても深い溜息を吐くのだった。